

学校心理士会神奈川支部ニュースレター

第 30 号



巻頭言

2022年6月19日発行
発行責任者 芳川玲子
〒259-1292
平塚市北金目 4-1-1
東海大学文化社会学部心理・社会学科
「芳川玲子」研究室

小学校の学校管理職という立場で行う一次的援助サービス

2020年4月、始業式の後、新しい学級の友達もほとんど知らないうちに2か月間の臨時休業になった。この期間は、子どもたちの学習補償を優先にしながらも、子どもたちが抱える不安に対して、まだ一人1台のPCが無かったので、「心をつなぐプロジェクト」と名付けて、一言メッセージを伝え合う試みを行った。また、学校だよりでは、毎日子どもが家庭にいる保護者が煮詰まってしまわないよう、保護者を励ますメッセージを意識して書いた。

6月から学校を再開する時には、不登校や行滞りが増加することを想定し、「学校が楽しい場所」という感覚を子どもたちに持たせるため、手洗いやマスク着用や朝の健康チェックなどの新しい学校生活習慣を教師が注意しないで身に付けられる工夫を考えた。教師が演じたビデオを作成し、再開前にYouTubeで公開し、昇降口から教室までの流れに、「マスクしていますか」「教室に入る前に手洗いしましょう」などのポスターを掲示し、手洗い場の前には、間隔をあけて並ぶための目印を床に貼った。子どもたちに見通しを持たせることで、教師が注意しなくても自ら身に付けられるように考えた。

また、2021年度には、学校教育目標を「みんなでつくろう 楽しい学校。みんなで めざそう やさしく かしこく たくましく。」に変更し、朝会の度に、学校教育目標を全員で唱えて、『一緒に楽しい学校を作っていきましょう。』と語りかけ、行事や遠足の延期や中止で沈みがちな子どもたちを励ます明るい学校風土づくりを心掛けてきた。

保護者に対しては、感染防止のため学校行事での保護者の参加制限や学級懇談会の中止など、教育活動を実際に見ていただく機会が極端に減ってしまった。そのため、今まで当たり前のように行ってきた教育活動の中から、本校の自慢できる教育活動を「学校の特色」としてピックアップして、限られた様々な機会に地域や保護者や教育委員会に発信してきた。

本校の特色 ○英語を好きな子を育てる教育 ○本が好きな子を育てる教育
○理科好きな子、ICT活用能力の高い子を育てる教育 など

教育活動の良いところを学校特色として積極的にアピールすることで、保護者や地域の方々の学校への信頼感を高めていきたいと考えた。また、今年度から学校ホームページが、より簡単に更新できるようになった。それを受け、教育活動を紹介するだけでなく、校長という立場から教育活動の意義や教師や子どもたちの頑張っている姿を積極的に伝えることを心がけてきた。直接的な児童への支援ではないが、学校風土や地域や保護者の学校観を創ることは、管理職としてできる一次的援助サービスではないだろうか。 (神奈川支部役員 上杉 忠司)

第57回研修会報告

日時 令和3年10月24日(日)
場所 ユニコムプラザさがみはら
(Zoomによる同時配信実施)

子どものメンタルヘルスと保護者への関わり方

講師：社会福祉法人青い鳥・横浜市東部地域療育センター所長 高橋雄一先生

○児童精神科の概要

児童精神科を受診する子どもは、成人と比較すると発達の問題や、「心因性」にあたる神経症性障害が多い。受診する際の主訴は年齢による特徴があり、幼児期は発達障害の診断目的が多く、小学校低学年では、入学後に生じた問題行動や学習困難、身体愁訴等が多い。小学校高学年から中学生では不登校を呈する子どもが増加し、成人期と同様の精神疾患もみられるようになる。一般に子どもは感情の言語化が難しいことから、精神的な問題が身体症状・行動上の問題として表れやすい。治療は、環境調整や心理教育が軸となるので、家庭や学校、福祉と連携した多角的なアプローチが必要となる。

○新型コロナウイルス感染症に伴う子どもの心の変化



国立成育医療研究センターが行っている「コロナ×こどもアンケート 第5回調査報告」によると、子どもの抑うつ関連症状の頻度が高くなっている。また、自傷・他害行為も20%みられる。前回調査と比較して、子どもたちの心身の健康が低下傾向にある。

○子どもの精神科診察の実際

初回は子どもとの関係性を重視し、「次も来てもいいな」と子どもが思えるよう最大の努力を払う。また、同席面接で親子関係を把握する。成育歴は保護者の陳述に加え、客観的な情報を得るため母子手帳や成績表を供覧したりしている。不登校等混乱した事態の渦中にある子ども

もや家族は、不合理な考えをしがちである。だが、それを訂正するのではなく、その苦悩を受け止め、辛い状況そのものに共感を示すことが子どもや家族の支えとなる。

○保護者への関わり方

精神科受診にあたって、子どもと親の思いが一致しないこともある。特に親の心配が強い場合や、逆に受診抵抗が強い場合は、背景にある親の不安に焦点を当てることが大事である。親自身が問題に直面することに抵抗感があることもある。また、子どもの問題が親だけではなくきょうだいに与える影響を考慮することも重要である。

親自身の精神医学的問題について、診療の初期に語られないことも多い。後に話が出た際には、「よく打ち明けてくれましたね」と受け入れるようにしている。ただし、親から語られる病名が実際は異なることがあることにも留意する。

○子どもの自殺の状況について

文部科学省の「令和2年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」をみると、小・中・高等学校から報告のあった自殺した児童生徒数は調査開始以降最多となっている。その要因は「いじめ」が一番多いのではなく、「家庭不和」「進路問題」等多くの要因が重なっている。

自殺既遂者の何十倍もの未遂者がいるとされ、多くの救急医療現場では多くの自殺企図者の対応を行っている。横浜市立大学附属市民総合医療センターの救命救急センターの調査によると、18歳以下の自殺企図症例のうち精神科医療を受けていた者が半数以上であり、過去に自殺企図歴のある者も2割以上であった。主な精神科診断は「神経症性障害」が過半数を占め、成人例と比較して環境反応性のものが多かった。Joinerによれば、自殺行動の三要素として「生物学的要因」「感覚鈍麻」「社会的孤立」が挙げられ、それぞれに応じた支援が必

要となる。特に環境の影響を受けやすい子どもでは、自殺行動を防ぐためには病院の支援だけでなく、家庭や学校、地域との連携が不可欠である。

○まとめ

齋藤は不登校支援に関して、「家族を支え、葛藤を克服し、社会的場に復帰する」とし、「個人療法・集団療法」「家族支援・家族療法」「社会とつなぐ居場所と人間関係への参加」の3要素を挙げている。これは不登校に限らず様々な状況の子どもの支援に共通するものと考えられる。また、精神科治療を行う上で、診断名そのものは臨床的に有用ではない。むしろ症状やその意味を理解しながら有効な治療計画を練ることと、原因や症状の除去ではなく、子どもを支える体制を作り上げる方が有効なことが多い (Barker, Philip)。子どもを支える「人・空間・時間」の提供が大事である。

(参考：横浜市立大学児童精神科ホームページ <http://www-user.yokoama-cu.ac.jp/~ycucap>)



第58回研修会報告

日時 令和4年2月27日(日)

場所 Zoomによるオンライン配信

学校心理士の立場に立った相談(カウンセリング)とコンサルテーション

講師：神奈川支部支部長 東海大学文化社会学部心理・社会学科教授 芳川玲子先生

○自己紹介と導入

本日は、「病院での心理士」「学校心理士」「臨床心理士」の3つの立場から話をしながら、学校心理士の相談もしくはカウンセリングを考えたい。

病院のメンタルヘルス相談は、病院内の全スタッフが対象となる。相談内容は常に具体的・現実的で、理由がはっきりしている。メンタルヘルスカウンセリングで大切なのは、本人の「健康なエネルギー」を確保しながら行うこと。カウンセリングは心のエネルギーの消耗に気をつけ、職場での相談の場合は、必要以上にセラピーを行って、本人が仕事ができなくなるまでしない。

○「困り感」と「悩み」

どちらも心理士がよく使う言葉である。「困り感」は定義が曖昧だが、佐藤暁氏の「嫌な思いや苦しい思いをしながらも、それを自分だけではうまく解決できず、どうしてよいか分からない状態にあるときに、本人自身が抱く感覚」がしっくりくる。一方「悩み」とは、「人の心の内において、何かについて心配したり苦しんだり気に病んだりしている状態」を表す。「悩み」は「困り感」より精神的で、抽象的である。

「病院での心理士の相談」は最も現実的で身体的であり、症状に沿って問題に対処する。「学校心理士の相談」は現実的で感覚的なものを扱っていて、「困り感」に対処する。「臨床心理士の相談」は非現実的な部分があったり心の内側を扱ったりしていて、「悩み」に対処する。

○学校心理士のアセスメント

病院心理士のアセスメントは、細かい聞き取りを行い症状の裏にあるものを探るもので、現実的である。心理学的アセスメントは、生物心理社会モデルをベースにしている。さらに、学校心理士は子どもと環境の相互作用を大事にしている。心理検査の結果だけでは不十分で、学校風土や学級風土を見たり保護者が本人をどう見ているかを聞いたり総合的に判断する。児童生徒理解のポイントは、「治療モデル」ではなく「教育モデル」。児童生徒を丸ごととら

え、「よいところ」を大事にみて子どもの「困り感」に焦点をあてて支援方法を考える。

○学校心理士の相談（カウンセリング）

対象は児童生徒とその関係者で、相談だけでなく一次的～三次的支援も行うため、強い「困り感」がない子どもも含める。学校心理士の人間観は「人間を包括的にとらえる」こと。「問題を解決してから教室に来なさい」ではなく、問題解決自体が成長の機会と考え、どう支援していくかを考える。また、学校心理士の支援は包括的支援を重視し、子どもに関わる多様な資源が連携する。

○学校心理士のコンサルテーション

システムズ・アプローチの「システム」とは、秩序を持った集まりのことを指す。「学校システム」は、「子どもの教育」という機能を期待されて構成されているシステムである。「学校」に期待されている機能が「校長」「教頭」「教師」「生徒」など個々の役割として分担され、構造として規定される。「学校文化」は「地域の風土と人々」「学校の歴史と伝統」「今いる教師と子ども」で形成されているので、常に変化している。教師も異動をすると新たな学校の風土を把握し、自分にどのような機能が求められているかを考えるが、それこそが「学校システム」である。「学校システム」がうまく機能していればよいが、そうでないと学校は機能不全に陥る。課題解決のためケース会議では、学校風土・学級風土の理解が不可欠である。システムは一つだけではなく、幾つも存在することを押さえておく必要がある。

チーム学校のチームアプローチでは、複数のシステムが同時に動いている。援助システムを常に点検することが必要である。

○学校心理士の危機対応

最近、生徒の自殺等、学校での危機対応のケースが増えている。学校危機管理としては、まだ起きていない事態に備える事前対策（リスクマネジメント）と、すでに起きてしまった事態への事後対応（クライシスマネジメント）とがあり、それぞれ心理支援が必要である。危機介入では本人の葛藤につき合いながら話を聞き、バランスをとりながら方向性を整理していく。いじめや虐待の聞き方はカウンセリングではなく、司法面接の方法論、すなわち、自由に報告させること、オープンな質問をすること、聞き取り方が構造化されていることが大切である。

2022年度の主な予定



- | | | |
|------------|------------------------------|--------------|
| 総会・第59回研修会 | 2022年6月19日（日）14:30～ | ユニコムプラザさがみはら |
| | テーマ：インクルーシブな学校組織文化の三層構造（仮題） | |
| | 講師：中田 正敏 先生（横浜創英大学看護学部非常勤講師） | |
| 第60回研修会 | 2022年10月23日（日）14:00～ | ユニコムプラザさがみはら |
| | 講師、テーマともに未定 | |
| 第61回研修会 | 2023年2月19日（日）14:00～ | ウィリング横浜 |
| | 講師、テーマともに未定 | |

【編集後記】第58回研修会は、新型コロナウイルス感染症第6波の渦中だったため、Zoomによるオンライン配信で開催しました。講師である芳川支部長のお話を受け、短時間ではありましたがブレイクアウトルームを活用して少人数による意見交流を行うことができました。当初は戸惑われた方もいらしたかもしれませんが、やはり他者との意見・感想を交流することは貴重な機会だと実感したひとときでした。

ryoshi@keyaki.cc.u-tokai.ac.jp（編集部）